Japanese Association of Educational Psychology

187 Japanese Journal of Educational Psychology, 1996, 44, 187—194

資 料

ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成

土 肥 伊都子[1]

CONSTRUCTION OF GENDER IDENTITY SCALE

Itsuko DOHI

The purpose of this study was to construct a scale to measure the "Gender Identity", and examine its reliability and validity. First, fifty-six items were rated by 184 male students, and fifty-seven items by 454 female students. Exploratory factor analysis yielded three factors. Three subscales were constructed for both male and female. These subscales were "accepting one's sex or gender", and "identification with parents", and "intimacy with the opposite sex". Each subscale contained ten items. Second, Cronbach's coefficient alpha provided some supports of reliability for each subscale. Third, confirmatory factor analysis provided some supports of validity to create three subscales.

Key words : gender identity, psychological androgyny, gender schema, reliability, validity.

目 的

従来，ジェンダー（社会的性）は，主に発達心理学・青年心理学の分野で研究されてきた（山本, 1984）。そこでは，社会化過程における性役割の獲得が問題とされ，個人は自分の生物学的性に期待されたジェンダーを，いかに内面化し性別化するかが研究されてきた。そのようなジェンダーの社会化の理論には，発達的同一視理論（Freud, 1927），社会的学習理論（Mischel, 1966），認知発達理論（Kohlberg, 1966）がある。Freud によれば，幼児はリビドーの満足の対象として異性の親へ強い愛着や独占への欲求を持つ。しかし，直接その欲求は満足できないために，同性の親を同一視することでその欲求を満たし，性役割が獲得されるとした。また，社会的学習理論は，多くの性役割以外の行動と同様，性役割行動も強化と観察という２つの学習によって獲得されるとした。社会的学習理論は，学習者である子供を，環境に受動的に反応するものとして扱う傾向があった。それに対して認知発達理論では，学習者自身が世界を能動的に理解する動機を持つことや，学習者の性の同一性の理解などの知的発達に注目した。そして，それらの要因によって性役割が獲得されるとした。

一方，社会心理学の領域では，ジェンダーを社会的カテゴリーの１つと捉え，ステレオタイプ(Broverman, 1970) や態度（Spence & Helmreich, 1972）の分野で研究が進められてきた。それらにやや遅れ，自己概念のレベルでもジェンダーの研究が行われるようになった。その代表として挙げられるのが，心理的両性具有性(psychological androgyny）の研究である（Bem, 1974)。

心理的両性具有性とは，個人における男性性と女性性の統合である。つまり，社会において男性的とされるパーソナリティ特性を自己概念として持ち（男性性），かつ女性的とされるパーソナリティ特性も自己概念として持つ（女性性）ことである。これは，男女にかかわらず，本来人間として備えるべき人格特性を幅広く自己概念として具有することを意味する。そのため，心理的両性具有性は，社会的な適応にも優れ，また心理的な健康度も高いことが示唆されてきた（Bem, 1975 ;

[1] 関西学院大学（Kwansei Gakuin University）

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

Spence et al., 1975 ; Heilbrun, 1976)。

さらに，近年では，情報処理的観点に立った，認知社会心理学の研究が蓄積されつつある（外山, 1990)。特に，自己の内的な特性や状態に関する知識が獲得された場合，その自己の知識がいかに組織され，統合され，構造化された体系となるか，さらにそのような知識構造が自己に関する情報の処理にいかなる影響を及ぼすか，という側面の研究も盛んに行われている（例えば, Markus, 1977 など)。このような認知的アプローチは，自己概念を長期記憶内の１つの構造として，また能動的な情報処理過程として捉え直したものと考えることができる。すでに，人格特性に関する自己概念は，その特性に関連した認知判断の反応時間や人物刺激の想起順序，行動観察の際の認知チャンクの長さなどの認知心理学的な測度と対応することが明らかにされている（岡本, 1991)。

上に述べた認知的アプローチをとる傾向の強まりとともに，男性性・女性性・両性具有性に関する研究も，様々な情報を処理する人間の認知図式が仮定されるようになった。ジェンダー・スキーマ(gender schema ; Bem, 1981）やセルフ・スキーマ（self-schemata ; Markus et al., 1982）などの概念がこれに該当する（土肥, 1994)。Bem（1981）のジェンダー・スキーマは，男性的・女性的というジェンダーに基づいた対象の認知を方向づける（性別化)。またジェンダー・スキーマは，個人が異性性（男性の場合は女性性，女性の場合は男性性）を自己概念として持つことを抑制する。なぜならば，ジェンダー・スキーマによってパーソナリティ特性が性別化（男性的あるいは女性的と認知）されると，異性役割のパーソナリティは自らの生物学的性とは相入れないと認知されるからである。

ところで Bem (1983) は，発達的同一視理論，社会的学習理論，認知発達理論を，ジェンダーの社会化に関する３つの理論とし，さらにジェンダー・スキーマ理論を第４の理論であると位置づけている。厳密に言えば，ジェンダー・スキーマ理論は，社会的学習理論と認知発達理論の両方に修正を加え，それらを統合したものとされる（Bem, 1983)。社会的学習理論では，幼児は男らしさ・女らしさに関する知識を学習すると考える。それに対してジェンダー・スキーマ理論では，幼児は男らしさ・女らしさの知識に加え，新しい情報に接触する際に，男女の性に関連づけて情報を処理する方法も習得すると考える。つまり，社会的学習理論が実際の性別化された行動の側面についての理論だとすれば，ジェンダー・スキーマ理論は，実際の行動に加えて，ジェンダー観，あるいは性別化傾向といった認知的側面の獲得についての理論であるといえよう。また，認知発達理論と比較すると，性の同一性に基づく個人の認知がモデルの行動を採択するかどうかを決定すると考える点で両者は一致する。ただし，認知発達理論では，なぜジェンダーが他のカテゴリー（例えば宗教や人種など）よりも優先的に自己概念に取り入れられるのかに対する考慮に欠けている。これは，社会的状況がジェンダーのカテゴリーの重要性を強調することが原因と考えたのである（Bem, 1983)。このように，個人の認知が社会に影響を受けて形成される面があると考えるかどうかが，ジェンダー・スキーマ理論と認知発達理論の相違点である。

さらに，従来のジェンダーの社会化理論では，同性性がいかにして自己概念として含まれるようになるかに注目した。それに対しジェンダー・スキーマ理論は，異性性がいかにして自己概念から除外されるか，に注目した。この点でジェンダー・スキーマ理論は従来の社会化理論と異なる。しかし，ジェンダー・スキーマ理論にしても，人はなぜ両性具有性を形成するに至るかについての考察はなく，この点においては従来から提起されてきた３つの社会化理論と変わりはない。

土肥（1995）は，ジェンダー・スキーマ理論によって両性具有性の形成を説明する際の問題点を３点挙げた。第１に，ジェンダー・スキーマの強弱の要因からだけでは，両性具有性の形成過程が明確にできない点である。ジェンダー・スキーマが獲得されると異性性は自己概念から排除され，男性的男性・女性的女性になるという見解は一貫して認められている。ところが，ジェンダー・スキーマが弱い場合，両性具有的なパーソナリティになるのか，あるいは男性性も女性性も低い未分化なパーソナリティになるのかは明確化されていない。第２に，現実には社会ではジェンダー・ステレオタイプが存在し，また人間は生物学的には男女いずれかの単性であるにもかかわらず，個人の認知過程にジェンダー・スキーマがない場合を想定している点である。

そして本研究と最も関連が強いのが第３の問題点である。それは，あらゆる情報処理を方向づけるジェンダー・スキーマが，自己概念の形成にもそのまま適用されていることである。しかし，人には自己概念，特に性格特性においては，同性的・異性的として認知された性格特性の両方を自己概念として取り込もうとする自我の働きがあると考えられる。土肥（1995）は，これをジェンダー・アイデンティティとして概念化した。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

ジェンダー・アイデンティティは，人格心理学の分野で成熟した人格の状態として提起された「人格の二面性」(森, 1983) や「自己」の二面性 (山本, 1989) などの概念をジェンダーに関して適用したものである。それは，ジェンダー・スキーマを持ち，男性的か女性的かという性別化の認知図式を持ちながらも，自己の性格特性に関してだけは，同性に望まれる性格特性も，異性に望まれる性格特性も，自らの中で統合しようとする自我の働きである。またこのような自我の働きは，自我アイデンティティと共通する。自我アイデンティティは，Erikson が「心理・社会的」アイデンティティと名づけたことからもわかるように，社会と個人との相互性 (mutuality) が高まることによって確立される。つまり，一方で他者と協調し，利他性を持ち，もう一方で一貫した自己存在の主張や利己性を持つことを志向する (井上, 1986)。自分の内的な世界を一貫して持つことだけではなく，自分と社会との関係の中での自分の位置づけがされてこそ，自我アイデンティティは維持されていく (鑪, 1990)。

このような自我の働きによって，心理的・社会的に男として，女としてのアイデンティティを確立した場合を考える。すると，異性的と認知した性格特性であっても，自己存在の主張に必要なものは自己概念として受容できるであろう。また，同性的と認知した性格特性が自分にとっては不必要と考えられる場合も，それが自分が社会的に認められる存在であるために必要とあれば，自己概念として受容することを促進するであろう。こうして，同性性と異性性の両立した状態，つまり，心理的両性具有性に近づくと予想される。

このような特性を持つジェンダー・アイデンティティは，以下の特徴によってその確立度が示唆されると考えられる。

第1に自己の性 (sex と gender の両方) の受容である。自らの性(sex)を受容していることや，これまでの生育歴において自分が受けてきたジェンダーの社会化を容認できた状態であることが前提となって，同性性を獲得することができるであろう。さらに，自己の性(sex)を受容していることが前提となって，性的同一性(sexual identity)を失うことなく，異性性を獲得することも可能となると考える。従って，これらは，ジェンダー・アイデンティティの確立の指標ともなり得るであろう。

第2に sex と gender の調整に関する問題に関与していることである。ジェンダー・スキーマは性格特性を男性的か，女性的かのいずれかに性別化する。ただし自らの生物学的性 (sex) は男女いずれかの一方である。このような状態において，ジェンダー・アイデンティティは，心理的両性具有性の形成を促進するものとして想定される。その際には sex と gender の間での葛藤が生じると予想される。そこで，この葛藤を解決するためには，自分の父母が同性モデルとして有効であったか，父母との同一化を経験したか，あるいは，両親間の人間関係から将来の生活への展望を方向づけできたかなどの経験が重要であると考える。従って，これらの経験がジェンダー・アイデンティティの確立の指標ともなり得るであろう。

第3に異性との間に親密な人間関係を保つことである。異性との親密な人間関係は，個性を発揮した異性へのアプローチができることや，異性選択への心理的な準備ができることで形成される。これらはジェンダー・スキーマによって形成されたステレオタイプ的な男性性や女性性を持つ状態では高まらない。ジェンダー・アイデンティティによってジェンダー・スキーマの見直しがなされることが示唆される。従って，異性との親密性もジェンダー・アイデンティティの確立の指標となり得るであろう。

本研究の目的は，これら「自己の性 (sex と gender) の受容」「父母との同一化」「異性との親密性」の3つの下位概念を仮定し，ジェンダー・アイデンティティを測定する青年期後期から成人期初期向けの尺度を作成することである。

また本研究では，尺度の構造を検討するために，確認的因子分析を行う。各々の下位尺度に含まれる変数が，特定の概念 (ジェンダー・アイデンティティ) を測定したものとして関連性があるとすれば，下位尺度に含まれる変数間に潜在特性がないと想定するナルモデルよりも，単一の因子を想定したモデルの方が，適合性は良くなると仮定できる。また，3つの下位尺度が，それぞれ特定の下位概念を測定しているとすれば，全尺度項目に単一の因子を想定したモデルよりも，3つの因子を想定するモデルの方が，適合性は良くなると仮定できる。そこで本研究では，確認的因子分析モデルを複数用意し，それらのモデルを比較する。

方 法

1. 項目の収集と整理

ジェンダー・アイデンティティの下位概念として仮定した「自己の性の受容」，「父母との同一化」，「異性との親密性」のそれぞれを具体化した項目を作成した。この中には，男性のみに対して用いられる項目，女性のみに対して用いられる項目も含まれている。この際，

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

内容が明確に表現されているか，さらに内容が重複していないか，といった観点から項目を整理した。この結果，最終的に残った項目(男子用56項目，女子用57項目)を予備尺度項目とした。

2. 質問紙の実施

調査対象者：大阪府・兵庫県内の4大学(短期大学1校を含む)の学生，計638名。うち，女性が454名，男性が184名であった。

調査項目：男性用56項目，女性用57項目の予備項目のそれぞれに対し，自分はどのくらい当てはまるか，を4件法により評定させた。選択肢は，「1．まったく当てはまらない」「2．どちらかといえば当てはまらない」「3．どちらかといえば当てはまる」「4．とてもよく当てはまる」である。得点が高いほど，ジェンダー・アイデンティティが強いことを示す。

調査の実施：1994年1月，各大学の授業時間内に実施した。

結　果

1. 探索的因子分析

尺度項目の候補として残った男性用56項目，女性用57項目を，それぞれ因子分析(初期解は主成分解)にかけた。固有値は第3因子までが高く，そこから急に減少した。そこで，因子数を3に指定して因子分析を行った結果，具体的には，第1因子は異性との親密性に関する項目，第2因子は性の受容に関する項目，第3因子はジェンダーモデルとしての父母との同一化に関する項目が高く負荷し，ジェンダー・アイデンティティの3下位概念と対応が見られた。

2. 項目—下位尺度間相関による項目の選定

因子数を3に指定した探索的因子分析において，第3因子までに高く負荷した項目で3つの下位尺度を作成することとした。まず，各下位尺度ごとに，項目—下位尺度間相関を求めた。また，因子負荷量の高い項目を候補にして α 係数を求めた。その α 係数や項目—下位尺度間相関が低い場合，次の候補項目と入れ換え，最も α 係数の高い項目群を探索した。その結果，男性用はTABLE 1，女性用はTABLE 2に示した10項目ずつの下位尺度を作成した。

各下位尺度ごとに各項目得点(4件法)を単純合計したものを下位尺度得点とした。得点範囲は10点から40点である。

3. 下位尺度の特徴と信頼性の検討

各下位尺度ごとの平均，標準偏差，α 係数，下位尺度間の相関係数をTABLE 3に示した。α 係数より，各尺度に一定の信頼性が確保されていることが示された。

TABLE 1　男性用尺度項目と3因子相関モデルの影響指数(標準化解)

	変数名	項　目	標準化解
性の受容	x10	私は男に生まれて損をした。(反転)	.723
	x11	女として生まれた方が幸せだった。(反転)	.597
	x12	親は「男のくせに…」というのが口癖だった。(反転)	.792
	x13	子供を持つつもりはない。(反転)	.615
	x14	男だから、といって親からよく体罰を受けた。(反転)	.702
	x15	私が女だったら，親は学校の成績のことでうるさく言わなかったのにと思う。(反転)	.539
	x16	異性に恋愛感情を持ったことがない。(反転)	.519
	x17	ひげが生えるのは、男として恥ずかしいことではない。	.506
	x18	男の体はゴツゴツしていていやだ。(反転)	.492
	x19	男はスポーツの1つぐらいできなくてはいけない、と親に強制された。(反転)	.280
父母との同一化	x20	両親の仲はよかった。	.784
	x21	私の親は話がわかる。	.548
	x22	幸せな結婚生活が送れるかどうか，は自分でしっかり考えるべきだ。	.562
	x23	妻とは長年、人間的に刺激しあって生きていくつもりだ。	.687
	x24	結婚しても離婚するかもしれない。(反転)	.513
	x25	小さい頃、親に学校でのできごとをよく話した。	.489
	x26	私の父は威厳がある。	.463
	x27	結婚後の生活は相手次第であり、どうなるかわからない。(反転)	.436
	x28	私はどんな親になっているか、見当がつく。	.376
	x29	異性に対して理想を持っている。	.364
異性との親密性	x30	私はよく一対一のデートをしている。	.815
	x31	異性との話題には事欠かない。	.734
	x32	好きな異性にアピールできる個性がある。	.714
	x33	異性に対しては自分から話しかける方だ。	.651
	x34	好きな異性に自分から告白できない。(反転)	.625
	x35	異性の友人が多い。	.602
	x36	恋愛することは人生で大切なことだ。	.627
	x37	好きな異性のことを相談する同性の友人がいる。	.529
	x38	好きな異性を前にすると緊張する。(反転)	.500
	x39	好きな異性にはありのままの自分を見せている。	.431

4. 因子分析モデル間の比較検討

因子を想定しないナルモデル(null model)と単一因子

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 2 女性用尺度項目と3因子相関モデルの影響指数（標準化解）

変数名	項目	標準化解
性の受容	x10 私は女に生まれて損をした。(反転)	.891
	x11 男として生まれた方が幸せだった。(反転)	.905
	x12 恋愛することは人生で大切なことだ。	.505
	x13 好きな異性のことを相談する同性の友人がいる。	.337
	x14 子供を産まなかったら、人生の重要な部分が欠ける。	.421
	x15 子供を持つつもりはない。(反転)	.825
	x16 男に生まれ変わりたい。(反転)	.847
	x17 恋愛についての記事をよく読む。	.139
	x18 女ならでは、の人生の楽しみを見つけたい。	.380
	x19 だいたいの出産プランがある。	.182
父母との同一化	x20 両親の仲はよかった。	.428
	x21 私の親は話がわかる。	.325
	x22 親への反発や反抗心が今でもある。(反転)	.785
	x23 他の家の子供に生まれたかった。(反転)	.758
	x24 親は「女のくせに…」というのが口癖だった。(反転)	.597
	x25 親は帰宅が夜遅いことをいつもとがめる。(反転)	.570
	x26 母から女としての生き方を見出した。	.523
	x27 親は私が女性であるために，旅行を許可してくれない。(反転)	.453
	x28 小さい頃でさえ，親と一緒に旅行へ行かなかった。(反転)	.427
	x29 女という理由で、いつも家事をさせられる。(反転)	.413
異性との親密性	x30 私はよく一対一のデートをしている	.783
	x31 異性との話題には事欠かない。	.805
	x32 好きな異性にアピールできる個性がある。	.650
	x33 異性に対しては自分から話しかける方だ。	.838
	x34 好きな異性に自分から告白できない。(反転)	.585
	x35 異性の友人が多い。	.725
	x36 好きな異性には、ありのままの自分を見せている。	.698
	x37 好きな異性を前にすると緊張する。(反転)	.654
	x38 交際している異性の短所も許せる。	.325
	x39 異性との交際が長つづきしない。(反転)	.340

TABLE 3 下位尺度の特徴と信頼性の検討

	男性用尺度			女性用尺度		
	性の受容	父母との同一化	異性との親密性	性の受容	父母との同一化	異性との親密性
平均	34.3	27.9	27.4	31.1	29.1	24.6
(標準偏差)	4.11	3.97	5.46	4.30	4.69	4.97
α係数	.71	.65	.82	.73	.71	.78
尺度間相関 性の受容	—	.232	.244	—	.117	.148
尺度間相関 父母との同一化	.232	—	.280	.117	—	-.011
尺度間相関 異性との親密性	.244	.280	—	.148	-.011	—

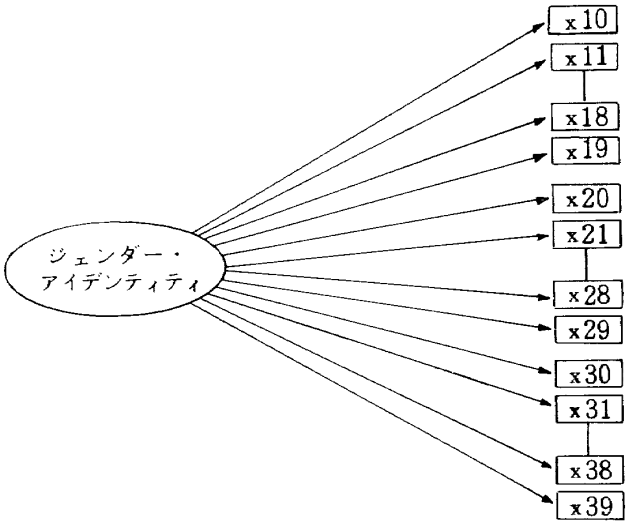

FIGURE 1 単一因子モデルのパス・ダイヤグラム

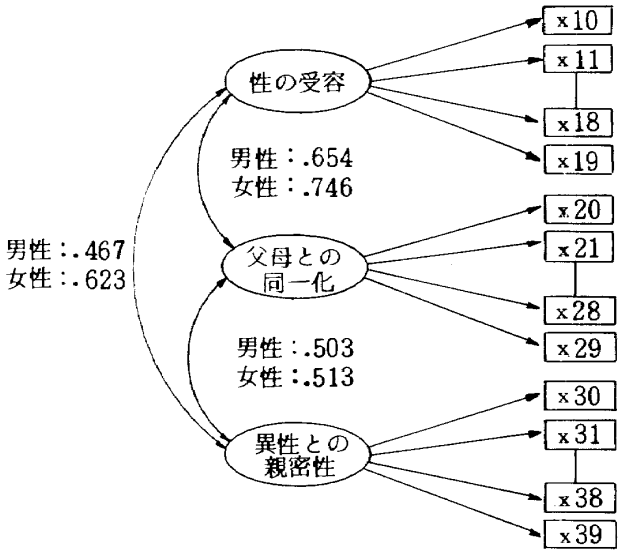

FIGURE 2 3因子相関モデルのパス・ダイヤグラム

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

を想定した共分散構造分析[2]モデル（FIGURE 1）の比較を行った。また，単一因子を想定したモデルと相関のある3因子を想定した共分散構造分析モデル（FIGURE 2）の比較を行った。すべてのモデルの全体的評価を示したχ^2検定，GFI(Goodness-of-fit index ; Joreskog & Sorbom, 1985)，AGFI (Adjusted Good-ness-of-fit index)，AIC (Akaike's Information Criterion ; Akaike, 1974, 1987) はTABLE 4の通りである。また，モデル間の比較を行った結果は，TABLE 5の通りである。比較する2モデルのχ^2値の差のχ^2検定やAIC値の低さなどを検討した結果，男女とも，単一因子相関モデルの方がナルモデルよりも全体的評価が高かった。また3因子相関モデルの方が単一因子モデルよりも全体的評価が高かった。

5. 3因子相関モデルの検討

本研究で作成された各尺度項目について，想定された3因子からの影響指数を確認した。男性についてはTABLE 1，女性についてはTABLE 2に，3因子相関モデルの標準化解（すべての変数の分散を1に標準化した時の推定値）が示されている。母数の推定値が0であるという帰無仮説の下でのt値を求めた。その結果，男女ともに3因子のいずれかから観測変数（各尺度項目）への影響指数はすべて，母数が0であるという帰無仮説を棄却できた（$p<.001$）。

TABLE 4　確認的因子分析モデルの全体的評価

		χ^2	df	prob	GFI	AGFI	AIC
男性	ナルモデル	1470.72	435	p<.0001	.4964	.4617	600.72
	単一因子モデル	760.99	406	p<.0001	.6885	.6433	94.73
	3因子相関モデル	406.73	405	p<.0001	.7739	.7404	-49.00
女性	ナルモデル	2356.47	435	p<.0001	.6167	.5903	1486.47
	単一因子モデル	2137.48	406	p<.0001	.6665	.6180	1325.48
	3因子相関モデル	1468.68	405	p<.0001	.8033	.7741	658.68

TABLE 5　確認的因子分析モデル間の比較

		χ^2	df	prob	AIC
男性	ナルモデル 対 単一因子モデル	709.73	29	p<.001	ナル>単一因子
	単一因子モデル 対 3因子相関モデル	354.26	1	p<.001	単一因子>3因子
女性	ナルモデル 対 単一因子モデル	218.99	29	p<.001	ナル>単一因子
	単一因子モデル 対 3因子相関モデル	668.80	1	p<.001	単一因子>3因子

[2] サン・ワークステーション上のUNIX版SAS (Ver.6.07)のCALISプロシジャを使用した。

また，男女とも3因子間には，やや強い正の相関が認められた。具体的には，「性の受容」と「父母との同一化」の間には，男性で$\phi=.654$，女性で$\phi=.746$，「性の受容」と「異性との親密性」の間には，男性で$\phi=.467$，女性で$\phi=.623$，「父母との同一化」と「異性との親密性」の間には，男性で$\phi=.503$，女性で$\phi=.513$という相関が認められた。この3因子間の相関は，ジェンダー・アイデンティティという高次因子からの影響を示唆するものと考えられる。

考　察

本研究は，土肥（1995）のジェンダー・アイデンティティの構成概念を測定する尺度を作成することが目的であった。男女とも，「性の受容」，「父母との同一化」，「異性との親密性」の10項目ずつから成る3下位尺度を作成した。尺度の信頼性は，一応認められた。また構造的・内的考察として，確認的因子分析モデル間の比較を行った。その結果，3つの下位尺度を設定することの妥当性が示唆された。ただし，本研究の共分散構造分析モデルの適合度は総じて十分に高いものではなかった。そのため，本研究で作成された尺度は，ジェンダー・アイデンティティを測定する1つの試みとして考えるべきであろう。

今後，ジェンダー・アイデンティティ尺度の妥当性に関して，以下に示す検討が必要であろう。

第1に，尺度項目が，その構成概念の特性を反映しているかどうか，の検討である。ジェンダー・アイデンティティに関しては，自己に関する性格特性に対してのみ，ジェンダー・スキーマの働きを抑制すること，そして，ジェンダー・スキーマ自体はジェンダー・アイデンティティに関わらず存在すること，また，ジェンダー・アイデンティティの働きは，自我アイデンティティと共通することを仮定した。そこで今後の課題としては，ジェンダー・アイデンティティとジェンダー・スキーマとの関係や，両性具有性との関係，さらに自我アイデンティティとの関係についての検討がされなければならない。

第2に，作成されたスケールがどのような年齢層の対象者に関する研究で有効であるか，スケールの使用目的を明確にした上で，その目的に沿った外的妥当性の検討を行う必要がある。これはスケールの有効な利用範囲を明確にするためにも重要である。例えば，ジェンダー・アイデンティティは，青年期以降の発達段階で認められると仮定したが，成人期，老年期を通じての男性性・女性性・両性具有性を予測する上で有効な

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

尺度となりえると考えられる。

第3に，ジェンダー・アイデンティティの概念を数量的に捉えることの妥当性に留意することである。ジェンダー・アイデンティティは，自己と社会からの要請に折り合いをつけるものとしての自我同一性の概念を参考にしたものである。この自我同一性の測定においても，その達成度を数量的に測定する方法と並行して，質的な測定もされている。例えば，Marcia(1966)の自我同一性地位面接では，危機と傾倒の経験をし終えたか，経験の最中であるか，経験していないか，などの質的類型化を行っている。本尺度との関連性を探りながら，ジェンダー・アイデンティティの測定の際に，量的な尺度と，質的な指標とを相補的に有効利用する方法を模索していくことも必要となろう。

ところで，構成概念とその測定尺度を妥当化してゆく際の原則をまとめたものとして，構成概念妥当化パラダイム（Construct Validation Paradigm）がある。これは，1954年のアメリカ心理学会で紹介された「構成概念妥当性」についての議論をふまえて発展したものである。その中で，Loevinger（1957）は，以下のフィードバック・ループを提起した。それは，①理論的考察，②構造的・内的考察，③外的考察の3段階を通して，構成概念の測定尺度が精緻化され，また各段階で仮説を支持しない結果が出た場合は，以前の段階に戻って再検討を行い，それによって，構成概念をより妥当性のあるものに改善できる，というものである（平尾ら，1992）。土肥（1995）は，ジェンダー・アイデンティティの構成概念を提起したが，これは心理的両性具有性の形成要因を考察する中で提起したものであった。本研究は理論的考察に基づき，ジェンダー・アイデンティティの構成概念に関する構造的・内的考察の段階の研究であったと考えられる。より妥当性の高いジェンダー・アイデンティティの概念にするためには，外的考察の必要がある。これらの理論的考察，構造的・内的考察，外的考察段階のフィードバック・ループによって，ジェンダー・アイデンティティ尺度を今後，より精錬していくことが望まれる。

引用文献

Akaike, H. 1974 A new look at the statistical identification model. IEEE *Transactions on Automatic Control,* **19**, 716—723.

Akaike, H. 1987 Factor analysis and AIC. *Psychometrika,* **52**, 317—332.

Bem, S.L. 1974 The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology,* **42**, 155—162.

Bem, S.L. 1975 Sex role adaptability : one consequence of psychological androgyny. *Journal of Personality and Social Psychology,* **31**, 634—643.

Bem, S.L. 1981 Gender schema theory : A cognitive account of sex typing. *Psychological Review,* **88**, 354—364.

Bem, S.L. 1983 Gender schema theory and its implications for child development : Rasing gender-aschematic children in a gender-schematic society. Sign : *Journal of Women in Culture and Society,* **8**, 598—616.

Broverman, I.K. 1970 Sex-role stereotypes and clinical judgements of mental health. *Journal of Consulting and Clinical Psychology,* **34**, 1—7.

土肥伊都子 1994 ジェンダーに関する2種のスキーマ理論の比較検討 心理学研究, **65**, 61—66.

土肥伊都子 1995 心理学的男女両性具有性の形成に関する一考察 心理学評論, **37**, 192—203.

Erikson, E.H. 1950 Childhood and society. New York : Norton. 仁科弥生（訳） 1977 幼児期と社会 みすず書房

Freud, S. 1927 Some psychological consequences of the anatomical distinction between the sexes. *International Journal of Psychoanalysis,* **8**, 133—142.

Heilbrun, A.B. 1976 Measurement of masculine and feminine sex role identities as independent dimensions. *Journal of Consulting and Clinical Psychology,* **44**, 183—190.

平尾 桂・福永英彦・松岡克尚・立木茂雄 1992 オルソン円環モデルの構成概念妥当性に関する理論的・実証的研究（VI）：FACESKG IIとSIMFAM-KGの開発にいたるまでの研究展望 関西学院大学社会学部紀要, **66**, 97—117.

井上眞理子 1986 アイデンティティとモラトリアム 命題コレクション社会学, **50**（Pp.330—336） 筑摩書房

Joreskog, K.G., & Sorbom, D. 1985 LISREL VI : Analysis of linear structual relationships by maximum likelihood, instrumental variables, and least squares. Uppsala : University of Uppsala.

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

Kenny, D.A. 1976 An empirical application of confirmatory factor analysis to the multitrait-multimethod matrix. *Journal of Experimental and Social Psychology,* **12**, 247—252.

Kohlberg, L. 1966 A cognitive developmental analysis of children's sex-role concepts and attitudes. In E. Maccoby (ed.) The development of sex differences. Stanford University Press.

Loevinger, J. 1957 Objective tests as instruments of psychological theory. *Psychological Reports,* 635—694.

Marcia, J.E. 1966 Development and validation of Ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology,* **3**, 551—558.

Markus, H. 1977 Self-schemata and processing information about the self. *Journal of Personality and Social Psychology,* **35**, 63—78.

Markus, H., Crane, M., Bernstein, S., & Siladi, M. 1982 Self-schemas and gender. *Journal of Personality and Social Psychology,* **42**, 38—50.

Mischel, W. 1966 A social-learning view of sex differences in behavior. In E. Maccoby (ed.) The development of sex differences. Stanford University Press.

森 知子 1983 質問紙法による人格の二面性測定の試み 心理学研究, **54**, 182—188.

岡本浩一 1991 ユニークさの社会心理学 川島書店

Spence, J.T., & Helmreich, R.L. 1972 The attitudes toward women scale : An objective instrument to measure attitudes toward the rights and roles of women in contemporary society. *Journal Supplement Abstruct Service Catalog of selected Documents in Psychology,* **2**, 66.

Spence, J.T., Helmreich, R., & Stapp, J. 1975 Rating of self and peers on sex role attributes and their relation to self-esteem and conceptions of masculinity and femininity. *Journal of Personality and Social Psychology,* **32**, 29—39.

鑪幹八郎 1990 アイデンティティの心理学 講談社

外山みどり 1990 『自己の姿の把握』の段階 中村陽吉（編）「自己過程」の社会心理学 東京大学出版会

山本真理子 1984 「性役割」 日本児童研究所（編）「児童心理学の進歩」, Pp.138—165.

山本里花 1989 「自己」の二面性に関する一研究——青年期から成人期にかけての発達傾向と性差の検討—— 教育心理学研究, **37**, 302—311.

謝 辞

本論文の作成にあたり，御指導下さいました関西学院大学，藤原武弘教授ならびに立木茂雄教授に心から感謝いたします。本論文の調査にあたり，佐渡靖司・菜畑涼子・岩尾佳則各氏（関西学院大学社会学部平成6年度卒）の協力を得ました。ここに記して感謝いたします。

(1995.8.14 受稿, '96.1.29 受理)

NII-Electronic Library Service